

第8次

石ヶ坪遺跡調査報告書

2008年3月

島根県益田市教育委員会

第8次

石ヶ坪遺跡調査報告書

2008年3月

島根県益田市教育委員会

序 文

本報告書は、益田市教育委員会が旧匹見町で決定された「匹見歴史（考古）資料館」の設置との答申を受けて、平成18年度に実施した石ヶ坪遺跡の発掘調査成果をまとめたものです。

益田市匹見町は益田市域の南東端に位置し、その南側は中国山地の脊梁を境にして山口・広島の2県に接した位置にあり、そうした立地から恵まれた縄文文化に育まれてきた地区であります。

この調査では、前回の出土状況を鑑みて設定したものでありますが、南西端を中心には縄文遺物・遺構が包蔵していることが確認されました。例えば、遺物では土器類約10,000点、石器類800点、また遺構は柱穴・土坑88基そして2基の配石を検出するなどの大きな成果を得ることができました。

とくに360点余り出土した並木・阿高式土器は、九州北部との縦起的な関係にあったことを語っており、一方で磨消縄文・沈線文土器などの在地的土器などからは、集団相互間の接触があったことが窺われるなど、地域史を追究する上で貴重な資料だったといえます。

最後になりましたが、発掘調査および本報告書の刊行にあたり協力いただきました地元の方々、また関係者の皆様に厚く御礼申し上げ序文といたします。

平成20年3月3日

益田市教育委員会
教育長 陶山勝

例　　言

1. 平成18年度、益田市教育委員会が歴史（考古）資料館建設予定に伴って石ヶ坪遺跡を発掘調査を実施し、その結果を本報告したものが本書である。

2. 調査は、次のような体制で行なった。

調査主体	益田市教育委員会	山 本 浩 之
調査員	益田市教育委員会 文化振興課 主任主事	渡 辺 友千代 栗 田 美 文
調査補助員	益田市教育委員会 文化振興課	渡 辺 友千代 栗 田 美 文 大 賀 幸 恵 大 谷 真 弓
	臨時	
調査指導	鳥根県教育委員会文化財課 主幹	柳 浦 俊 一
"	島根大学法文学部准教授	山 田 康 弘
調査協力	山口大学人文学部教授	中 村 友 博
事務局	益田市教育委員会 教育長	陶 山 勝
益田市教育委員会 次 長		領 家 貞 夫 (18年度)
"		寺 戸 純 児 (19年度)
益田市教育委員会 文化振興課長		安 達 正 美
益田市教育委員会 文化振興課 補佐		木 原 光
益田市教育委員会 文化振興課 主任主事		山 本 浩 之
発掘作業員 齊藤 幸夫	藤井 一美	宮市 勇 藤原 剛志
藤井 初義	渡辺婦友子	吉原 延子

3. 調査に際しては、地元の方々に終始多くご協力をいただき、無事に終えたことに対して感謝するとともに、また本編集に助言をいただいた渡辺聰氏にお礼を申し上げるものである。

4. 編集にあたって

- ・調査における遺構は、柱穴遺構—P、土坑状遺構—S K、溝状遺構—S Dと略号した。
- ・現場あるいは編集で使用した地図面は、益田市土地改良区の協力を得た1/1000の縮尺のものであり、また位置図などは縮尺1/25000を使用した。
- ・出土遺物および調査記録などの関係書類は、益田市四見埋蔵文化財調査室に保管している。
- ・編集には、前掲の調査員・調査補助員・臨時職員らの協力を得て、執筆・編集は渡辺が行ったものである。

目 次

第1章 発掘調査に至る経緯と経過	1
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第2章 自然環境と歴史環境	2
第1節 自然環境	2
第2節 歴史環境	3
第3章 調査の概要	4
第1節 はじめに	4
第2節 調査区の設定	4
第3節 調査概要	5
1. 堆積状況と遺物・遺構包含層	5
2. 遺構	7
第4章 出上遺物	13
第1節 はじめに	13
第2節 出土遺物の概要	13
1. 出上の状況	13
2. 縄文遺物について	14
第3節 揭示遺物	15
1. 実測土器	15
2. 実測以外の土器	21
3. 実測石器	25
第5章 小 括	27

挿図・図表目次

第1図 遺跡位置図	1
第2図 位置とその周辺の遺跡分布図	2
第3図 遺跡配置図	4
第4図 遺跡地区名図	5
第5図 土層図	5
第6図 遺構断面図（1）	7
第7図 遺構断面図（2）	8
第8図 遺構全面図	9～10
第9図 坑内の配石立体図	11
第10図 実測土器（1）	16
第11図 実測土器（2）	17
第12図 実測土器（3）	18
第13図 実測土器（4）	20
第14図 実測土器（5）	21
第15図 実測土器（6）	22
第16図 実測土器（7）	23
第17図 実測石器（1）	24
第18図 実測石器（2）	25
第1表 遺構計測表	6
第2表 出土遺物出処表	13
第3表 出土遺物種別表	14

図版目次

図版1 遺跡の近景と堆積状況

1. 石ヶ坪遺跡近景（東北東から）
2. A 1区の南西壁の堆積状況
3. B 3区の南東壁の堆積状況
4. 壁に表出した陥入ピット坑
5. B 1区の北西壁の堆積状況

図版2 遺物の出土状況

1. 阿高式土器（第10図-11）
2. 矢部奥田式土器（第11図-22）
3. 磨消繩文土器（第12図-29）
4. 波状沈線文土器（第13図-44）
5. 黒耀石（乳白色）製の石鏃（第18図-24）
6. 安山岩質の石核
7. 凝灰岩質の打製石斧
8. 凝灰岩質の凹石（第17図-8）

図版3 遺構表面と検出状況

1. 4層・5層との層界面状況（A 1区）
2. SD 01-2の陥入状況（北西から）
3. 層界面に表出した遺構（拡張区）
4. B 2区に表出した遺構
5. SD 01上の配石（北東から）
6. SK 32の半截状況（北から）
7. SK 39の遺構検出状況（南から）
8. SD 01-1の完掘状況（西から）

図版4 遺構の状況

1. B 1区の遺構（北東から）
2. B 2区の状況
3. ベルトを挟んで出土したSK 43
4. SK 43とその周辺の遺構（北東から）
5. B 2区の東端部のピット群
6. SD 01-2の完掘状況（東から）
7. SK 31とその周辺の土坑（南西から）
8. B 1・B 2区の北東半の遺構（北東から）

図版5 調査区全景

1. 北東からみた調査区
2. 北東からみた完掘状況

図版6 実測土器（1）

1. 並木・阿高式土器類
2. 阿高系・矢部奥田式・磨消繩文土器類

図版7 実測土器（2）

1. 磨消繩文土器類
2. 沈線文土器類

図版8 実測土器（3）

1. 沈線文土器類

2. 沈線文・無文土器類

図版9 実測土器とその他の土器

1. 無文土器・装飾突起・底部

2. 実測以外の土器

(I～VIIは中期末・VIII～X IIは中期末～後期初頭)

図版10 実測石器

1. 磨製、打製石斧・凹石

2. 石錘・削器・石鏃・湖片

第1章 発掘調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

本調査の切っ掛けは旧匹見町の折り（平成16年11月1日以前）、当該地に「匹見歴史（考古）資料館」を設置する、という答申（匹見町歴史資料館建設委員会）が提出されたことによる。したがって、これに基づき平成16年10月3日から同31日にかけ、範囲確認調査（第7次）を行った。その結果、予定地の南南東端に遺物包含層が存在していることが判明したため、本調査が必要となったのであった。

よって、益田市教育委員会は文化財保護法第94条第1項に基づき、平成18年6月5日付（益教文第63号）で、そして同法99条第1項の規定のものは同6月19日付（益教文第75号）で、埋蔵文化財発掘調査の通知を島根県教育委員会へ提出し、事前の諸手続きを終えたのであった。



第1図 遺跡位置図

第2節 調査の経過

現地調査は、平成18年7月19日から始めた。遺物は同月30日ごろから確認されるようになったが、最も多かったのは8月初旬から中旬にかけてであった。中旬以降は遺構が検出し始めるとともに、その反面、遺物は半減するという状況で進行していったのであった。

調査は同年12月5日をもって無事に終了したが、縄文遺物を中心に約10,800点（土器類10,000点・石器類800点）、遺構は88基（P43・SK43・SD2）を検出するなど大きな成果を得ることができた。この間、10月4日には島根県埋蔵文化財調査センターの柳浦俊一主幹、同月24日には島根大学法文学部の山田康弘准教授の調査指導を仰ぐことができたことに対し、お礼を申し上げたい。

そして明けた平成19年2月27日には匹見タウンホール集会室において、現地説明会という形をとつて報告会を実施したが、その折は山口大学人文学部の中村友博教授にお世話になったことを付記しておきたい。なお遺物整理・報告書作成等の業務は、渡辺友千代の責任のもとに平成19年度中に終了する予定で進められてきたのであった。

第2章 自然環境と歴史環境

第1節 自然環境

石ヶ坪遺跡は、島根県益田市四見町紙祖イ530-1番地ほかに所在する。（第1・2図・図版1-1）。

該当地区は、中世代白亜紀に成るという断層谷に立地するが、北東—南西方向に走る3本のうちでも最も顕著な臼木谷断層にある。基盤層は同時期に形成された火成岩質凝灰岩に覆われておらず、そこを縦って流下する河谷はその断層谷に従って北東—南西流するといった形をとっている。

本遺跡は、その断層谷に沿って北東流する紙祖川の右岸に立地し、標高290.6m前後を測る原野（もと水田）である。南西（上流）側約400mを測る地点には七村川が合流しており、一方北東側は、幅300m余りの広がりをみせて谷平地が直線状に延びているといった景観にある。遺跡はその南東端の山裾寄りに位置する（第2・3図・図版1-1）。

そして断層谷を挟む山地は500~800m台を測って並走し、流域にはツバキ・サカキ・カシ類などの照葉樹がみられるものの、中・高位地は大半がナラ・クリ・ホウ・シデ・カエデなどの落葉樹林が繁茂している。こうした環境にあるためドングリ・クリ・といった堅果類、そしてヤマイモ・ユリネといった根茎も豊富である。そういう恵餌を求めて徘徊するツキノワグマ・イノシシ・タヌキ・キツネ・ウサギといった中・小動物、そして河谷にはゴギ・ヤマメといった冷水魚も生息しているという環境下に存在している。



凡例

- | | | | |
|---------------|--------------|--------------|------------|
| ● 石ヶ坪遺跡(縄文) | ① 小松尾城跡(中世) | ② 森ヶ溢塚遺跡(中世) | ③ 長沢遺跡(古代) |
| ④ 水田ノ上A遺跡(縄文) | ⑤ 下正ノ田遺跡(古代) | ⑥ 仏頭遺跡(古墳) | ⑦ 神田遺跡(縄文) |
| ⑧ 諏訪城跡(中世) | ⑨ 江田古墳(古墳) | ⑩ 塚田遺跡(弥生) | ⑪ 筆田遺跡(弥生) |
| ⑫ ヨレ遺跡(縄文) | ⑬ イセ遺跡(縄文) | ⑭ 上ノ山城跡(中世) | ⑮ 下手遺跡(弥生) |
| ⑯ 和田古墳(古墳) | ⑰ 上ノ原遺跡(縄文) | | |

第2図 位置とその周辺の遺跡分布図

第2節 歴史環境

右ヶ坪遺跡から上流（南西）側は河幅は狭まり、また段丘も発達していないためか、遺跡は少ない。しかし、下流側に向かっては遺跡の密度は高い。例えば縄文時代の水田ノ上遺跡があり、そこでは上偶や勾玉・円盤形土製品といった呪術具が発見され、しかも検出された遺構は環状列石ではないかといわれている。また同じく匹見川との合流地点には晩期の神田遺跡などがある。そして古墳時代のものでは石仏頭遺跡、古代のものでは下正ノ田遺跡、10棟の隅丸方形堅穴住居が検出された長グロ遺跡も分布している。また中世期のものでは、指呼の七村川との相会地に小松尾城跡、対岸には森ヶ溢塚遺跡という絆塚も発見され、そして1.5キロド流の合流地には諫訪城跡もある。

このように、縄文遺跡を基軸として点在しているということは、該地が狭長ながらも河岸段丘が形成されているからにほかならなかったといえよう。しかも四周には狩猟採集を基調した縄文人にとって根幹である、森の資源がひかえているからであったと考えられる。しかもそうした肥沃した土地柄は古代、中世へと引摺る要因にもなったのであろう。

一方、尾根（中山）を挟み背中合わせの匹見川と広見川とが合流する地区では、特にその分布密度が高い。例えば、早期押型文が出土した上ノ原遺跡があったり、ヨレ・イセ遺跡では後期の配石遺構が検出されている。特にイセ遺跡では上位層に弥生前期の住居址がみられるなど、該地に早い段階で弥生文化が到来していたことを実証付けるものとして注意される。このことは前・中期の塚田遺跡、また水田ノ上遺跡で出土した細形銅戈などが補強しているが、山間地でありながらその要因は何であったかが大きな問題であるといえよう。

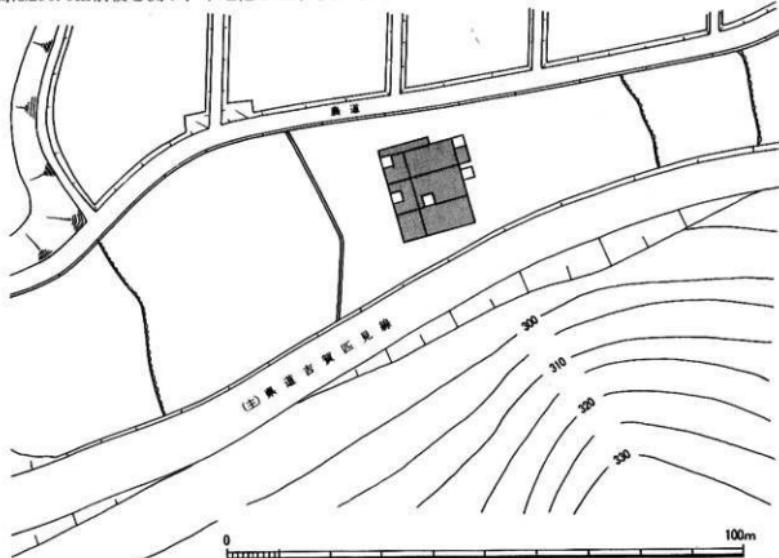
そのほか弥生では下手遺跡などがあり、古墳では山腹地に立地するという特徴をもつ江田古墳・和田古墳などがある。そして中世期のものでは、小松尾城跡に次ぐという広大な縄張り形態をもつ上ノ山城跡といった、山城も分布しているという歴史環境下にある（第2図）。

第3章 調査の概要

第1節 はじめに

本遺跡は旧匹見町であった折り、該当地（文化無蔵地と想定される下流域）に資料館を設置することになったため、平成16年10月に包蔵地の範囲確認の分布調査を実施した。8調査区（1区2m×2m）のうち、南西端の3調査区を主に遺物が出土したため、本回の調査となったのであった。

現地は、島根県益田市匹見町紙祖イ530番地ほかに所在し、紙祖川の右岸に立地する。なお表面標高は290.6m前後を測り、草地化した原野（旧水田）である（第3図・図版1-1）。



第3図 遺跡配置図

第2節 調査区の設定

調査区は、前回の出土状況を鑑み設定した。つまり、分布調査では南西端を中心に包蔵していることがわかったため、当地点域を中心とすることにしたのであった。ただ良好な包蔵地の南西（上流）側へは、分布調査での南西端の調査区までとし、包蔵物が希薄化する反対の北東（下流）側は、ある程度の余裕をもった造方とするようにして、凡そその範囲を決めるに至ったのである（第3図・図版1-1）。

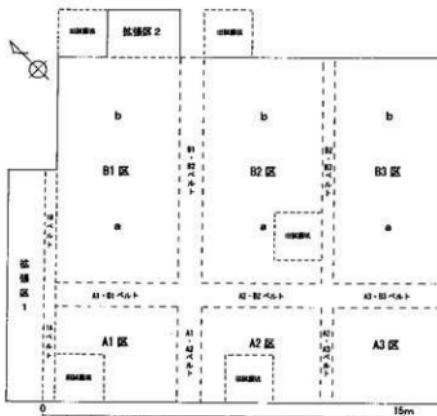
その結果、北東（下流側）－南西（上流側）方向へは14.5m、北西（河側）－南東（山側）方向に1.6mを測る長方形の調査区を設定したのであった。そして多量に遺物が出土した南西（上流）側の1/3域をA区、北東側の2/3域をB区とする2大区画とにした。さらにその区画内にはセクションベルトを縦・横に設けて、小・大の6区角に区分したのである。したがって、調査面積は232m²

としたのであった。しかし、調査が進行していく中で包含層の拡がりが確認されたことから1・2といった拡張区を設けたこともあって、区内の分布調査坑も含むが、最終的には267.24m²になつたのであった（第4図）。

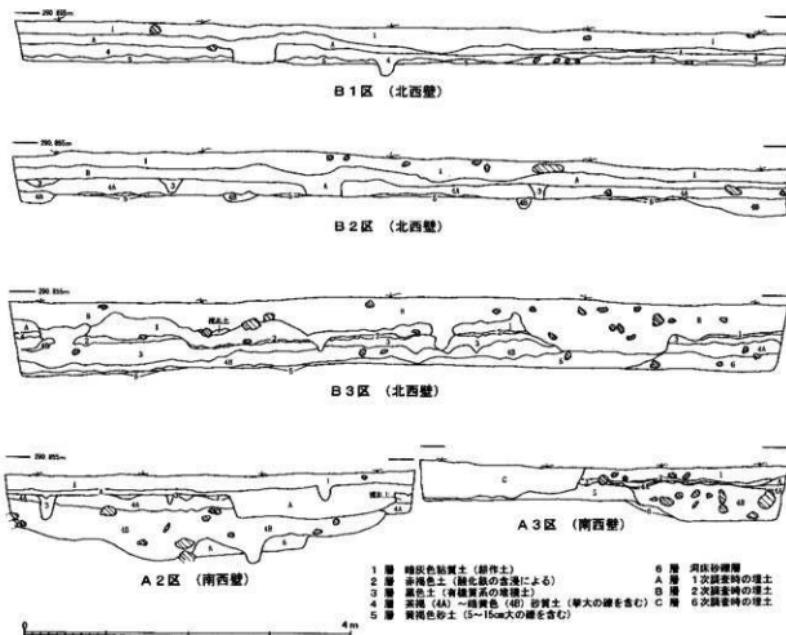
第3節 調査概要

1. 堆積状況と遺物・遺構包含層

堆積状況 基本的には、上位から耕作土としての暗灰色粘質土、2層の酸化鉄が含浸した赤褐色土、3層の有機質系の堆積した黒色土である。4層は茶褐（4A）～暗黄色（4B）土の砂質土で、本層には挙大の礫を含んでおり、また4B層としたものは、砂性おびるものであった。そして5層は、礫石を多く含んだ黄褐色砂土で、6層は基盤層としての河床礫の順に堆積していた。ただ当遺跡では過去7次を数える発掘調査が行われており、したがつ



第4図 遺跡地区名図



第5図 土層図

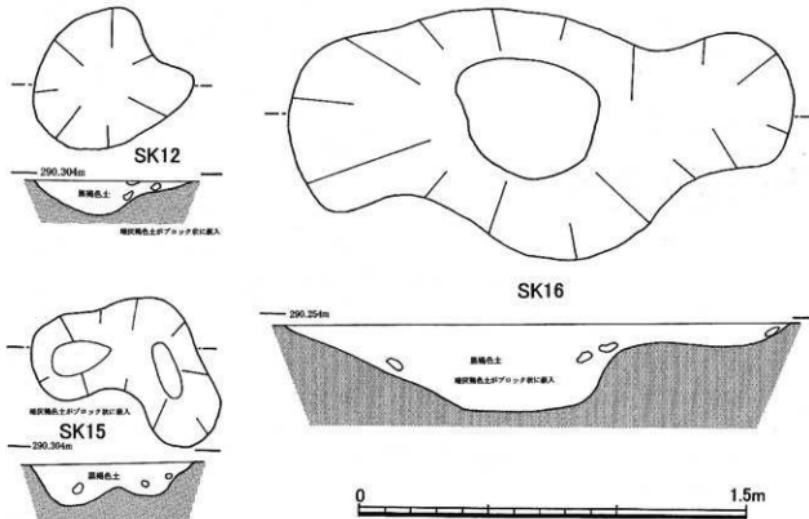
2. 遺構

はじめに 繩文遺構は4層と5層の層界面に表出したものの、陥入する5層が砂土であるために、坑壁はいずれも貧弱であった。おそらく構築層位は遺物の出土状況から判断して、3層中位から陥入していたものと考えられる。したがって第1表で掲示しているものは、原体の数値を表わしているものとはいえない。

なお柱穴状のものを一応Pと略号し、短・長径の平均が凡そ40cm前後を測るものとした。また土坑は、その径が45cm以上のものをSKと略号して捉えることにした。そして溝状を呈しているものはSDと略号し、SK内に共伴するピットは繁雑化するため、その数値などは表示しないことにした。中には遺構の円周状況から住居址の可能性があるものも捉えられるが、炉が未検出ということや埋土などの不確さから敢て略号することは避け、青線で暗示することにした。

P(柱穴状) 柱穴状のピットは、43基を検出した(第8図・第1表)。坑内には3層黒色土、とくに4層の暗黄砂質土(4A)が嵌入していたが、その坑高は20cm以下、と大半は浅かった。これらは坑形から直立的なもの、斜傾したものなどが捉えられ、また円形・楕円形、そしてP35のように2連結したものも捉えられた。また、坑下端部は平状のものもみられたが、多くはU文字状を呈するものであった。

これらのピット群を分布上から総観すると、他の土坑も含んでいるが、あるグループを形成していることが看取できる(第8図)。つまりP01~P06・P08を中心とした南西端域のグループ(1)。P11~P13・P15、P24~P34といった中心部のグループ(2)。P17~23、P35~P38の北東左辺のグループ(3)。P39~P43を中心とした北東右辺部のグループ

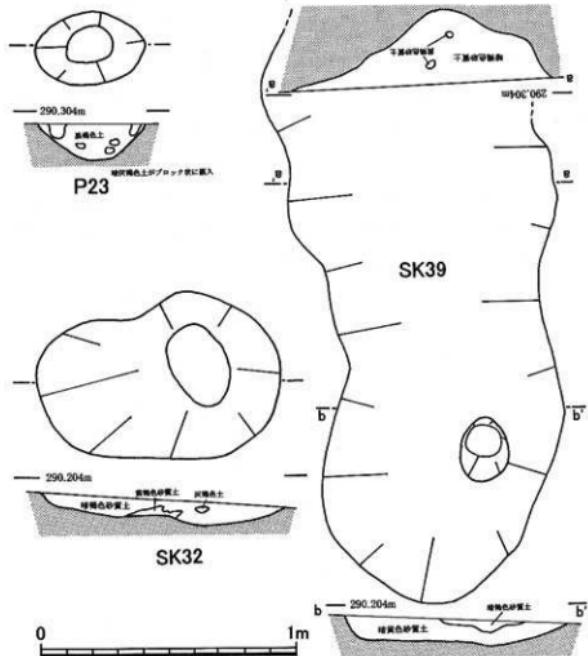


第6図 遺構断面図(1)

(4) というように、4つのグループである。

(1) のグループは片寄つて疎間的、(2) は径凡そ6mを測って梢円状に密集し、(3)・(4) は数基のSKを伴い、その径凡そ5mというように、各グループに若干の差異がみられる。この各グループ群が何らかの施設に伴うものと考えられるが、陥入層が砂性・砂土であったこともあって検出にも限りがあり、その実態を把握することができなかつたのである。また一方、構築面の上位層がオーバーフローなどによって流出した可能性が窺われたが、そうしたことが大きな要因であったと考えられる。したがつて、形態的に想定できない南西端域(1)のものは除き、他の3グループプランは柱列形態などからみて、住居址の基底部の形跡ではないかと想像している(破線で表示)。

SK(土坑)・SD(溝状土坑) SKとした土坑は43基が出土(第8図・第1表)し、その坑

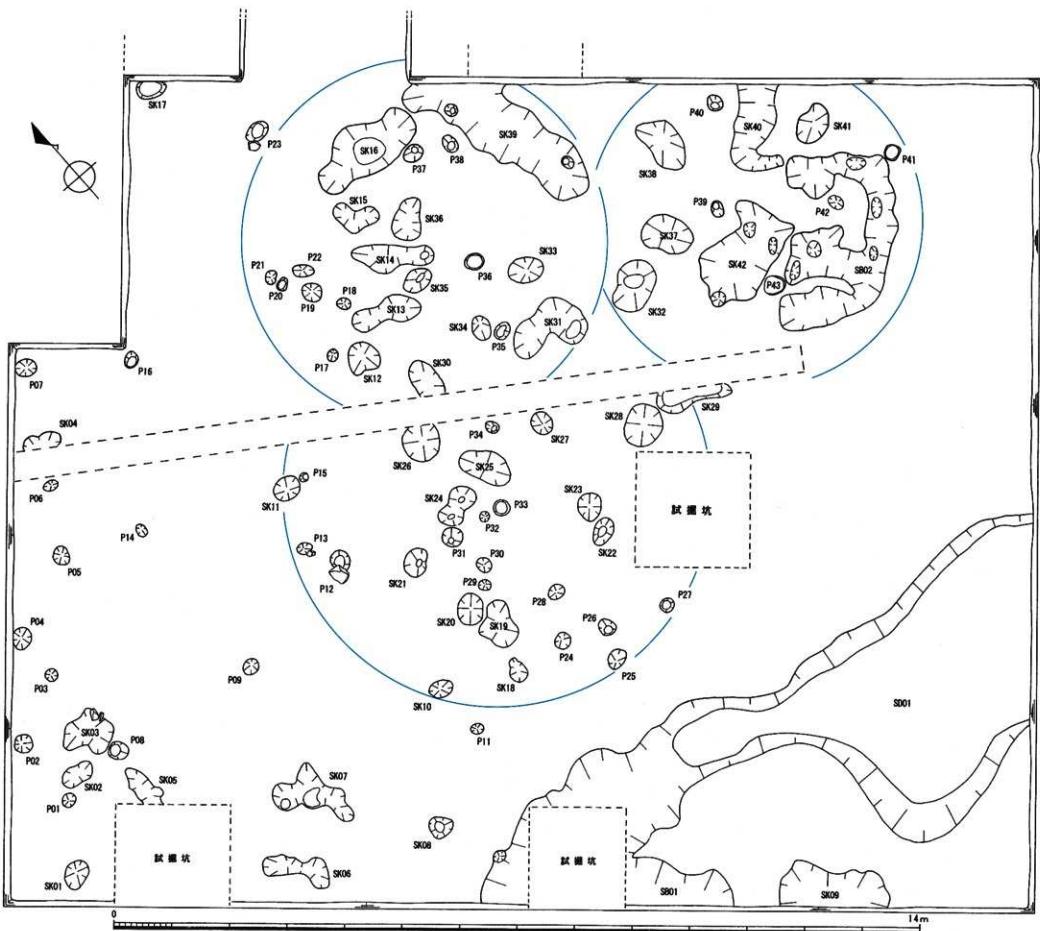


第7図 遺構断面図(2)

構がある一定のまとまりをもつて出土しているということは、それらが大きな時期差の中にあるといふものではなく、むしろ意図的な一連の何らかの施設(例えば住居址)に伴うもの、ということを証明しているともいえよう。

南西壁と南東壁とが交あう南端部に検出したSD(溝状土坑)01は、調査部外に貢入するものの、弧状描いて長さ約10mを測るといった大形のものであった。最大幅は約4mで、最も狭まつ

内には3層黒色土や4層茶褐色～暗黄色粘質土など、特にそれらが漸移・混合した暗褐色土系が陥入していた(第6図・7図)。そして06・07・13・14・16・18・24・31・39などは、2坑以上のものが複合、または連結らしきしたものもみられたが、これは同一層内ということから、その切り返しなどが把握でなかつたことによるものと思われる。したがつて時期的な新旧は勿論、個々の機能的役割なども判然しないという支障を生じてしまった。ただし個々の表面において標高差が余りなかつたことや、その柱穴・土坑などの遺

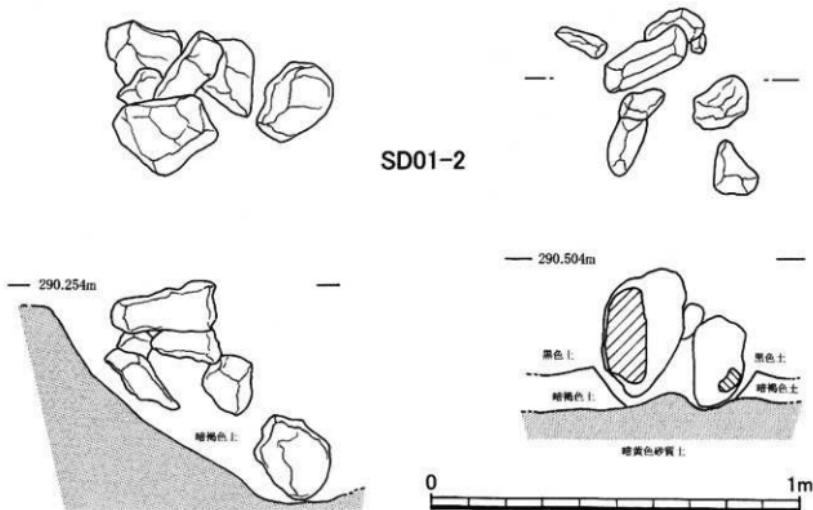


第8図 遺構全面図

た部分で1mを測ってバーベル状に-1と-2は連結する(第8図)。坑高は-1で50cm余りを測り、暗褐色土系に黒色土がブロック状に陥入していた(第9図・図版3-2・3-8)。とくに-1からは1,383点(土器1,058・石器325)、また-2からは215点(土器167・石器48)の縄文遺物が共伴しているもの延掘していないということもあって、形態上からもどういった用途的機能をもったものかを明らかにすることはできなかった。それにしても、共伴遺物が全体の出土数の1割以上を占める、というのはどうしたことによるものであろうか。その手立がなかったことが残念である。

配石 またSD01-2には、15~40cmを測る河原石を用いた配石らしきものが2基検出された。うち1基は、坑直上から50cm余りの下方のかけて6石が集石したものであった(第9図の左辺部)。集石の径は凡そ60cmで、その上位部の幅約20cm、長さ40cmを測る長形の1石は、横臥しているものの形状からして立石であった可能性もある。ただし坑壁が捉えられないと、集石形態以外に本遺構が人為的なものである、ということを証明するものは他には皆無であった。

もう1基は、直上の3層と4層との層界部に出土したもので、径70cm余りの楕円形の中に8石が疎・密に配されたプランのものである(第9図の右辺部・図版3-5)。層位からみて前者のものよりは後出期のもので、構築層位は3層である。8石で構成された河原石は15~40cmを測るもので、前者と比べて小振りで疎間的である。うち厚さ15cm、幅25cm、長さ37cmを測る平偏な1石は立石状をなし、その下面には4層に至る径45cmを測る楕円状の掘込み(約10cm)を有していた(第9図・図版3-5)。



第9図 坑内の配石立体図

また少量の炭化物を伴っていたが、木造構を中心に出土しているという状況からみると、何らかの因果関係があったことを想像させた。

前述したこれらの遺構は包含層序の不明確さもあって、けして良好なものとは言えるものではなかった。しかし密度の高さや、その所産時期が遺物の垂直分布または共伴性から、縄文中期後葉から同後期前葉のものと想定できたことは、一応の成果といつていいのではないだろうか。

第4章 出土遺物

第1節 はじめに

遺物の面的分布は各地区名（A1～A3・B1～B3・拡張1～2・各ベルト）ごとに捉えることにし、一方垂直分布においては層位別を基準に、そして遺構に共伴したものはその遺構名を記して取り上げるといった造方をした。

大半の遺物は原位置のものと思われるが、ただ後世の水流によるオーバーフローがあった様子が癒われることから、とくに縄文期のものは原姿のままとは言い難い。また中・近世の痕跡も否定できないが、こうした人為的介入も加えられていることなどが、遺物取り上げなどにおいて、層位の見定めを誤らしているものも多々あるのではないかと危惧している。

また、実測したものの中には記録の不鮮明から、不明とせねばならなかつたものなどもある。なお、第2表で「第1次調査分」としているものは、その調査時の残留品と思われるものであつたことを付加えておきたい。

	1層	2層	3層	4層	層位不明	未詳	その他	計
A1区	10		68	837				905
A2区	10		173	1,262				1,445
A3区	58		46	264				368
B1区	7		370	701				1,081
B2区	1		659	139				799
B3区	61	33	352	102	2			550
拡張区1		12		616				628
拡張区2			13	14				27
A1・B1								
A2・B2	9				690			699
A3・B3								
(北東-西岸ベルト)								
B1・B2								
A1・A2	6			623				628
(北東-西岸ベルト1)								
B2・B3								
A2・A3	5			147				152
(北東-西岸ベルト2)								
I A・I B				378				379
(新潟区ベルト)	1							
P23基						2,577		2,577
遺構(SK33基)							2,577	
S22基								
出土不明						14	14	
腐土上						394	394	
第1次調査分						141	141	
計	179	33	1,671	5,776	2	2,577	549	10,787

第2表 出土遺物出處表

第2節 出土遺物の概要

1. 出上の状況

出土遺物を出處地点からみると、層位で分別できるもの7,659点、遺構58基（P23基・SK33基・SD2基）からの共伴のもの2,577点、廃土や出土地点不明、第1次調査残留品などのその他が549点の、合計10,787点であった（第2表）。また遺物を種別すると、出土总数10,787点の99.75%の10,760点が縄文遺物（土器類9,950点、石器類810点）、そして陶磁器20点、その他の焼土塊や鉄製品など7点であった（第3表）。

地区名別に取り上げた面的分布においては、南西部のA地区（A1～A3区）が、北東辺部のB地区（B1～B3区）に比べて面積が2.7分の1と細少にもかかわらず、前者の調査区の出土点数は2,718点、後者は2,430点で上回り、その比率は3倍近い。このことは縄文遺物が上流側の南西部に向かって濃密に包蔵していることを意味しているものと思われる。

一方垂直分布においては、前述したとおり層位に仕別できるもの7,659点であるが、うち5,776点が4層の茶褐色～暗黄色砂質土で捉えられたもの、そして1,671点が黒色土の3層であった。1・2層

核心部分にせまることができるのではないかと思う。そしてそのキーポイントとなるのは、数点であるものの北白川C式（図版9-2）、また1次調査時でも1点出土しているが、矢部奥田式などの上器が、石ヶ坪遺跡の性格をどのように位置付けさせているものかなど、問題は尽きない。いずれにしても、これら土器群は、中期後葉から後期前葉にかけての所産であることには疑いはない。

石器 石器類の総計は810点で、うち160点余りが石斧・磨石・石錐といった利器類で、最も多かったのが剥・碎片の約616点、そして原礫が20数点であった（第3表）。これらの石器類を体積・重量などの法量を抜きにして、点数のみをもって位置付けようとしても無意味に近いが、ある程度の傾向は捉えられるのではないかと思い、以下列挙するとともに、若干の課題も記述しておきたい。

石材は安山岩が最も多く376点、剥片が大半を占めるが、利器としては20点が石錐に採用されている。そして乳白色（新島産）の黒耀石が190点で、うち172点の90%は剥・碎片、残る10%が石錐・剥片石器・石核などに採用される。なお产地は不明であるが、黒色の黒耀石も15点出土している。凝灰岩質のものは80点余り出し、20点の打製石斧のほとんどは同岩質のものである。そのほか石材では緻密なサヌカイト質のものも55点、數点のチャート・水晶もみられる。

利器としては石錐が43点と口立つが、これは河側という立地によるものであろう。石材は花崗岩質などの河原礫を材用し、いずれも両端を打欠くといった単工程のものばかりである。また20点の打製石斧は、該当期におけるところの組成率において、多であるのか、また適・少といえるのか気になる。そして損失のために不確かさをのこしているものの、1点出土した石棒と想定されるものはどう向き合えばいいのか、本遺跡の性格を考える上で課題も多い。

第3節 掲示遺物

1. 実測土器（第10～16図・図版6-1～9-1）

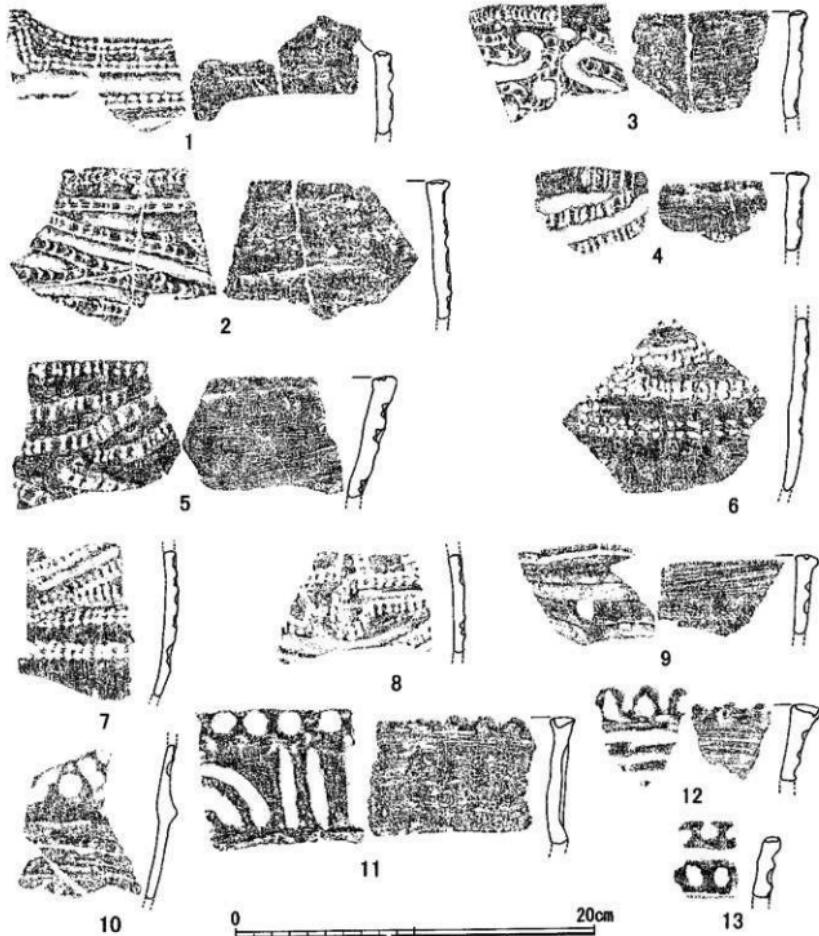
実測土器をみていくことにすると、紙数の関係上掲示できない資料も多くある。以下その特長が顕著なものを中心にみていくこととする。

1～8は、並木式。このうち1～5は、口縁部片、6～8は、胴部片である。いずれも滑石を多量に含む。1～4・7・8は押引文と回線文が組み合わさるもの。5は、回線文上に刺突文を施すもの、6は押引文を施すもの。

1は、口縁端部に突起を有し、二又状工具による押引文、外面は二又状工具による押引文とやや浅めの回線文によるL字状の文様を描く。2は、水平口縁で口縁端部に竹管による刺突文、外面は逆C字状の押引文と浅い回線が斜行する。また細描沈線文が横走する。

3は、水平口縁で外面文様の集約部の上位にあたる口縁端部にC字状刺突文、外面は逆C字状の押引文と曲線による深めの回線文、凹点文を施す。4は、水平口縁で口縁端部の一部にI字状の刻目、外面は斜行するI字状押引文と回線文を施す。5は、水平口縁で口縁端部に二又状工具による刺突文、外面は回線文上に二又状工具による刺突を施す。

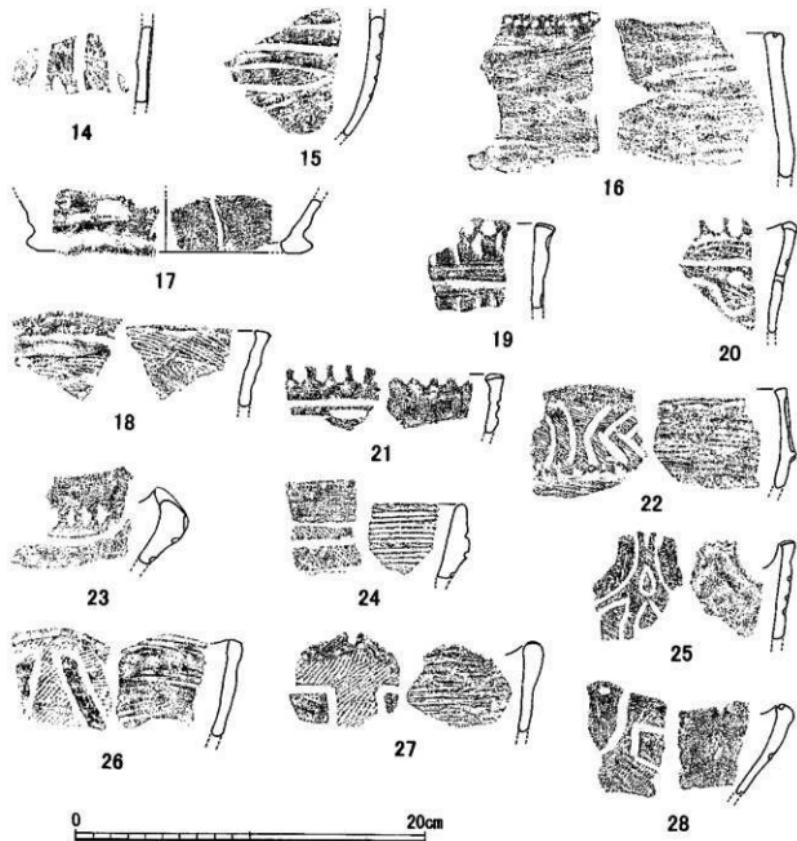
6は、二又状工具による縱・斜・横方向の押引文を施す。内外面に炭化物が付着する。7は、二又状工具による押引文を斜・横方向に施す。回線文は部分的に施されている。8は二又状工具による押引文と回線文で鉤状文様を描く。



第10図 実測土器（1）

9～15は、凹線文ないしは沈線文を施した阿高系土器で、滑石を多量に含む。このうち、9は口縁端部に細描沈線文を描くもので、並木式との関連が問題となる。外面は、施文幅の広い凹線文と凹点文を施す。10は、II縁部文様帯を段状肥厚により区画するもので、外面は弧状の幅広の凹線文と凹点文を施す。器厚は薄く、平原第2群a類に類例がある。

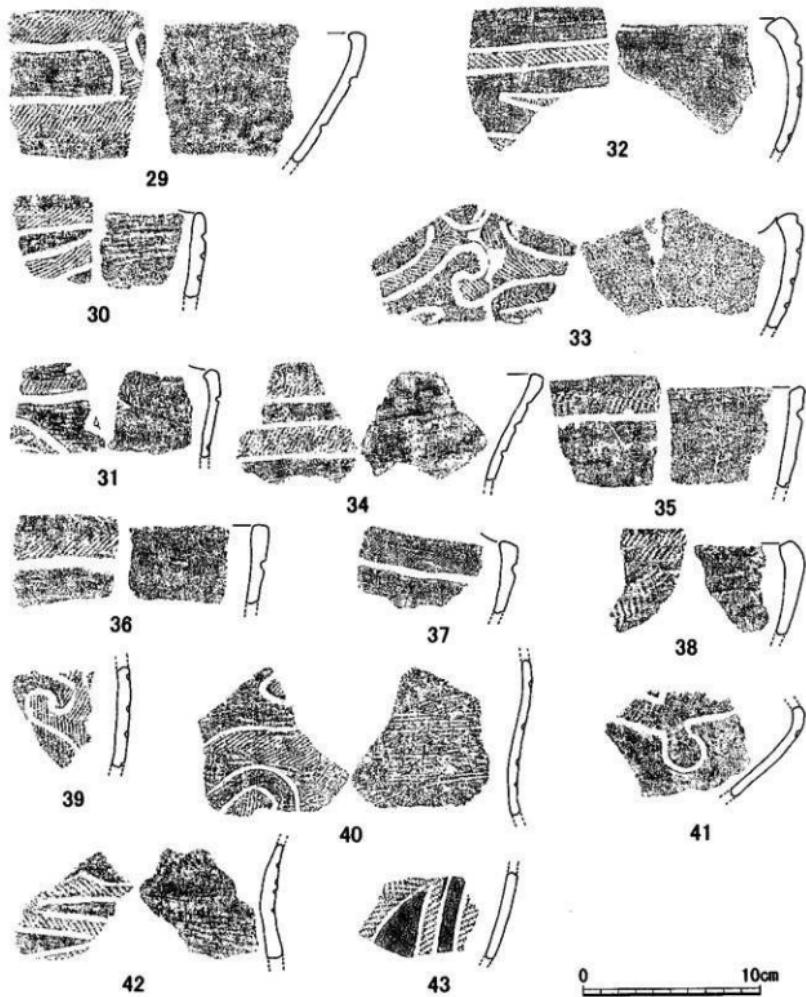
11～14は、阿高式。うち11は、II縁端部に凹点文、外面は縦方向の直線文と逆U字状の凹線文を施している。文様帶下位はわずかに屈曲しており、南福寺式の直前のものか。12は、口縁端部に内



第11図 実測土器（2）

外から交互に凹点文を施し、外面は幅の狭い凹線文が横走する。13は、口縁端部に凹点文、外面には沈線と凹点文を施す。14は、胴部片で、縦走する凹線文を施す。

15は、幅3mmの沈線文による横走する沈線を描く。本州系の中期末～後期初頭の型式の影響を受けたものなのか。16は、口縁端部に串状の施文具による刺突文を施す。胎七に滑石、角閃石質のものを含む。17は、胎土に滑石を含む底部片。外縁の張りが大きい平底を呈する。18～21は、滑石を含まない後期阿高系土器。18は、口縁部を平滑に仕上げる。外面には凹線文を横走させ、内面には二枚貝条痕が残る。19は、口縁端部を棒状工具で刻み、外面は押引ふうの凹点文と横走する凹線文を施す。20は、口縁端部を棒状工具で刻み、外面は曲線状と横走する沈線文を描く。また、外面から穿孔された補修孔がみられる。21は、同じく口縁端部を棒状工具で刻み、外面には短沈線と横走する沈線がみられる。



第12図 実測土器（3）

22は、矢部奥出式。口縁端部は平滑で、外面は無節Rを施文の後、対向する弧状、矢羽状の沈線文を施す。また肥厚部は、下方から竹管による刺突を施す。内面は巻貝条痕調整。石英、角閃石質のものを含む。

23～43は、後期の磨消繩文土器で、23～38は、口縁部片。このうち23・24は、口縁部を段状に肥厚するもの。うち23は、肥厚部に単節LRを施文の後、縦方向の短沈線で刻み、その下位は波状口縁に沿って沈線文を施している。24は、肥厚部に単節RLによる横位の磨消繩文帯を施し、内面には二枚貝条痕調整。

25～29は、区画文を文様意匠とするもの。うち25は、縦位の文様構成とし、紡錘形の区画文を2段に重ね、両脇には波状口縁に沿った区画文を配する。その区画文内には単節LRを施す。口縁端部には3条の刻目を有する。26は、斜行する楕円形区画文を描き、その外部は単節LRを施し、口縁端部は平滑である。内面は巻貝条痕調整。27は、横長の方形区画文としたものとみられる。区画の外部に単節LRを施し、波頂部には1条の刻目を施す。28は、方形区画文とU字状の区画文を施し、その下位に横走する沈線文がみられる。区画の外部には単節LR、波頂部には刺突文を施す。29は横長の方形区画文と弧状の沈線文がみられ、区画内はミガキ調整。区画の外部には単節LRを施す。30は、小片のため、文様構成が判然としないが、磨消繩文帯の幅、色調からみて、26と同一の個体かも知れない。

31・32は、横位の磨消繩文帯による幾何学的な文様構成としたもの。31は、外面上に曲線による単節LRの磨消繩文帯が施され、内面はミガキ調整。32は、単節RLによる横走する磨消繩文帯と鋭角状の磨消繩文帯を施され、内面はミガキ調整。33は、単節RLの磨消繩文帯による横長のJ字文を施すもので、その下位には横長の区画文を施す。

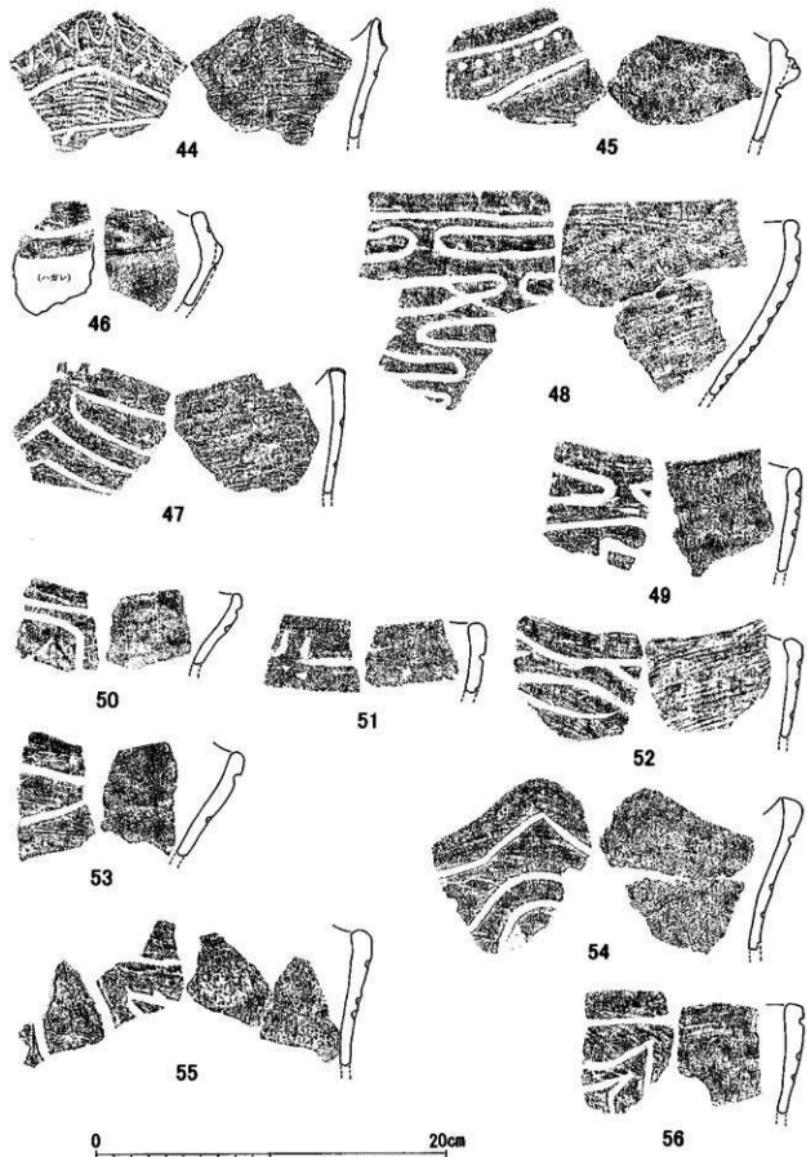
34～37は、単節LRによる磨消繩文帯が横走するもの。37は、下端に曲線の沈線文がみられる。38は、羽状の単節LR縄文のち、曲線による沈線文が施されている。

39～43は、胴部片。39は、単節RLの磨消繩文帯による横長のJ字文を施す。33と同一個体のものか。40は無節Lの磨消繩文帯による幾何学的な文様構成としたもの。41は、単節LRによる帯状の磨消繩文帯とU字状の区画文が連結したもの。42は、単節RLの磨消繩文帯が横行・斜行する。43は、単節RLの磨消繩文帯が縦、斜行するもので、縄文帯には赤色顔料が塗布される。内外面ともミガキ調整。

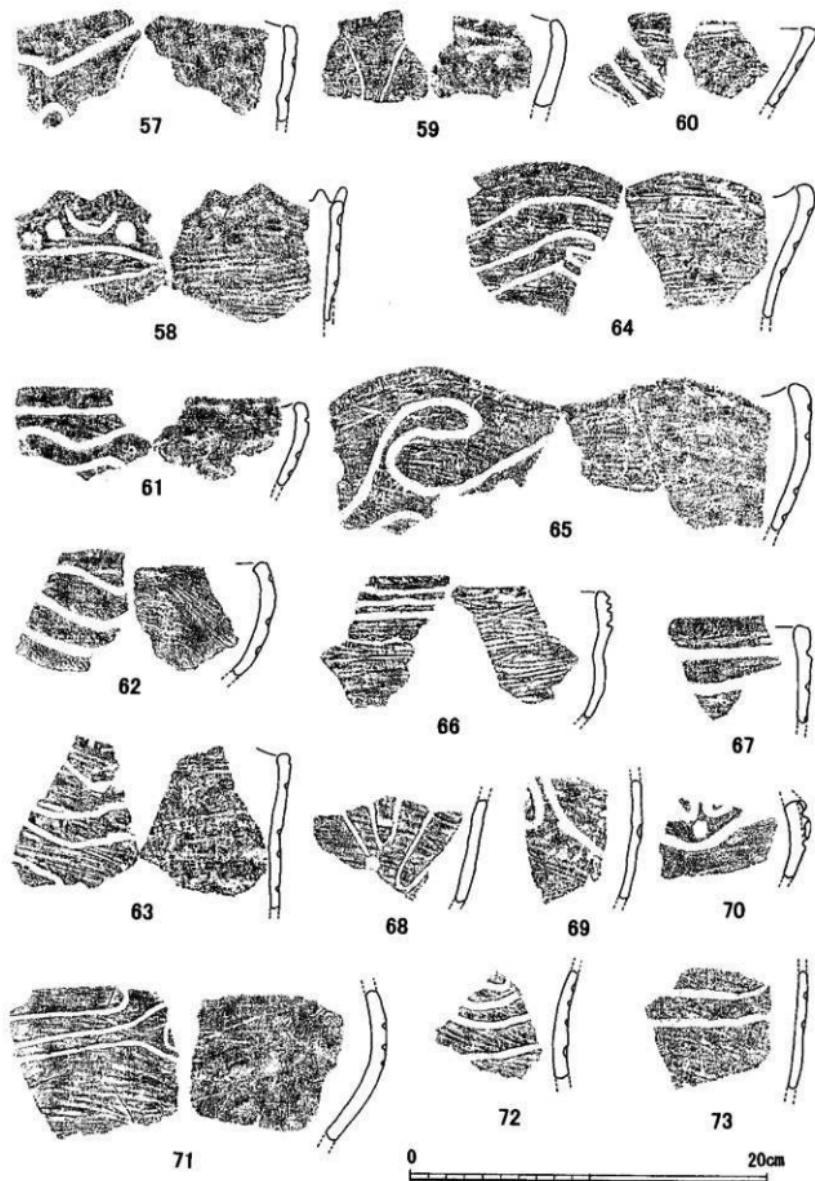
44～74は、沈線文土器。このうち44～67は、口縁部片、44・45は、口縁部を段状に肥厚するもの。うち44は、肥厚部に波状沈線文を施し、その下位を波状口縁に沿う山形の沈線文で区画する。その下位に斜行する沈線文を施す。中期末～中津式成立期のものか。45は、肥厚部に刺突文、その上下に波状口縁に沿った沈線文を施し、またその下位に沈線文が横走する。46は口縁部が内折し、その部位に横走する沈線文を施す。

47～52は、区画文を文様意匠とするもの。うち47は、波頂部に刻目を2条施し、外面上は斜行する横長の区画文、その下位は波状口縁に沿った山形沈線文を施す。48は、横走する直線文の下位に横長の楕円形区画文を多段に重ね、その口縁端部は丸みおびる。49は、横長の楕円形区画文とJ字状の沈線文を施す。50は、横走する直線文の下位に方形区画文を施す。51は、上方が開く方形区画文と、その下位に横走する沈線文がみられる。52は、波状沈線文と弧状沈線文が組み合わさり、横長の紡錐状区画文を構成するもの。

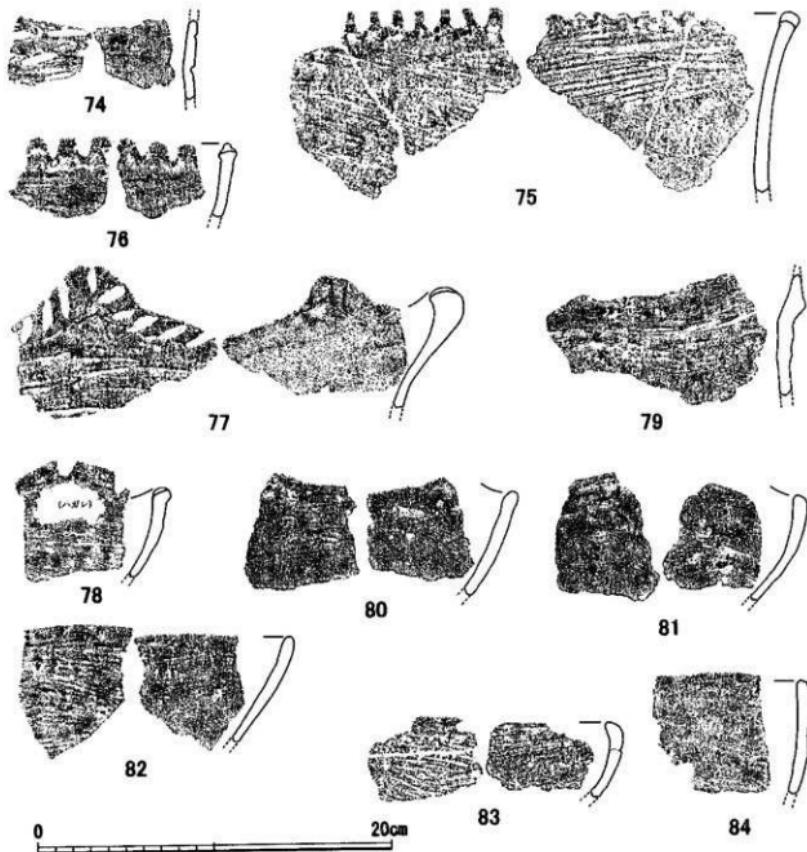
53は、斜行する沈線文が2条施されたもの。54～58は、幾何学的な構成としたもの。54は、波状



第13図 実測土器（4）



第14図 実測土器（5）

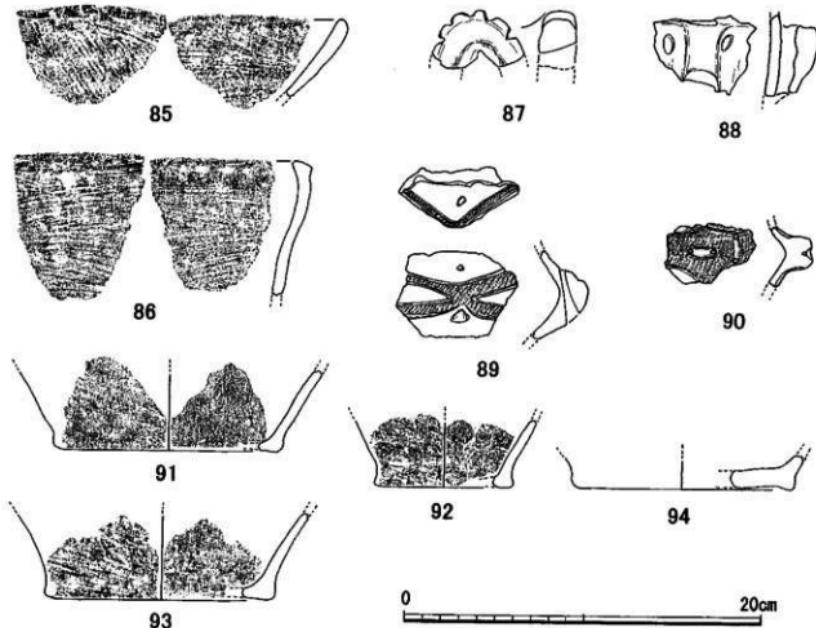


第15図 実測土器（6）

口縁に沿う山形沈線文と、その下位に弧状の沈線文を施す。55は、縦長の紡錘状区画文、その右辺に波状口縁に沿った斜行する直線文と横長区画文としている。56は、口縁直下に横位直線文、その下位に曲線による幾何学的な文様としたもの。57は、波状文と逆U字状の沈線文を施す。58は、波頂部に2つの突起を有し、外面はU字状の沈線の両脇に凹点状の刺突文、その下位に斜行する沈線文を連結させたもの。59は、細描沈線によりV字状の沈線文を施す。

60～65は、波状文あるいは波状文が拡大、展開した横長J字文を施すもの。60は、口縁端部を折り返し状に成形し、内面は凹凸がみられる。61は、横走する直線文の下位に拡幅の緩やかな波状文を描く。62は、2条の波状文を施す。63～65は、横長のJ字文を施すもので、65はJ字文が拡大化したもの。そして66・67は、直線沈線文が横走するもの。

68～74は、胴部片で、68は斜行する楕円形区画文を施す。69は、曲線による沈線文を施すが、文



第16図 実測土器（7）

様意匠は判然としない。内面にわずかな凹凸がみられる。70は、幅広の波状沈線文の上位に凹点状の刺突文と、斜行する区画文を施す。71は、横長J字文を呈したものと予想され、その上位には曲線状の沈線文を施している。72は、横長J字文、その下位に波状文を施す。73は、2条の横走する直線文を施す。74は、分断する短直線文を施したもの。

75～86は、無文土器。75・76は、口縁端部を棒状工具で刻む後期阿高系に属するもの。77は、波状口縁を成し、斜行する刻口を施す。78は、口縁端部を部分的に刻むもの。79は、上位に段状の肥厚部がみられるもので、中期末のものか。

80～86は、口縁を刻まない無文土器。うち80・81は、ミガキ調整、82の外面は巻貝条痕調整で、内面はナデ。83は内外面巻貝調整、84は内外面ナデとしたもの。85は内外面二枚貝条痕調整、86の外面は二枚貝条痕調整のち巻貝調整、内面は二枚貝調整である。

87～90は、把手・突起部。87・88は、橋状把手。87は、5条の刻目沈線文を施す。88は、縦方向に開く橋状把手部で両脇の隆蒂文と連繋し、隆蒂文の下位には凹点文を配す。89は、縦に貫通孔を有する壺の肩部。単節LRの磨消繩文帯に横長の筋錐文が施されている。90は、同じく壺の肩部で単節RI繩文帯内に短沈線を施し、その内部に刺突文を施している。

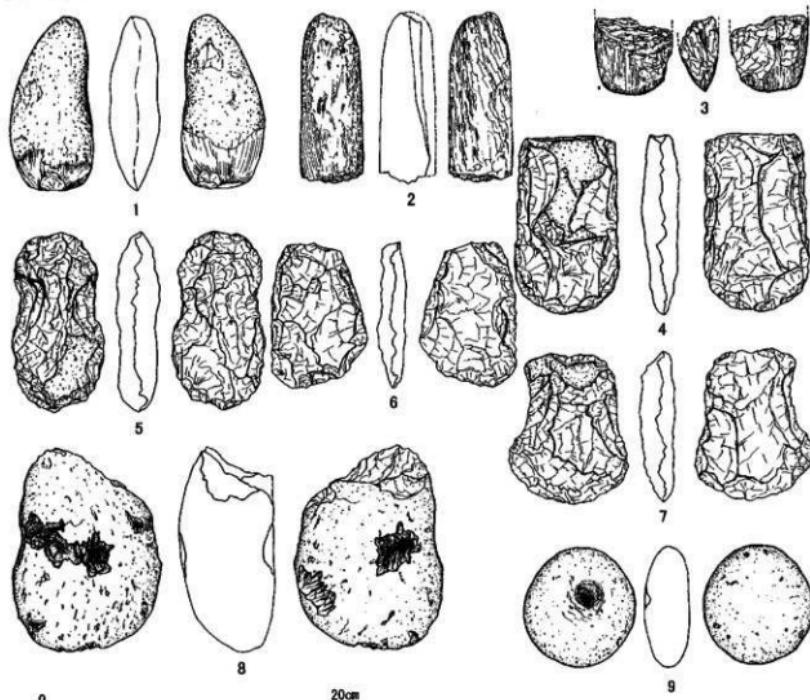
91～94は、底部片。胎土に滑石は含まず、うち91～93は、平底で、こうした形態のものがほとんど（第3表）。92には補修孔を有する。94は、低台の底部である。

2. 実測以外の上器 (図版9-2)

紙数の関係から多くの掲図化を省いたが、落丁するにはしのびない10数点を図版で紹介しておきたい。

Iは、滑石混入上器。細沈線で区画文に描き、その沈線内に刺突を施文したもの。阿高系では今だ捉捕されていない文様で、区画文を主体とする系統のものか。IIは、キャリバー形を呈し、外面に曲線文を施文したもので、北白川C式のA類のものか。III・IVは、外面に細沈線を波状に施文したもの。器壁は薄手で波打つが、外面は丁寧なナデ。里木豆式から派生したものか。V・VIは、箱形の山形口縁部。折返した口縁外面に沿って2条沈線を描き、その区画内に無節L繩文を施文。北白川C式C類か。VIIは、段状肥厚した口縁部で、矢部奥田式土器。R L (0段多条) 繩文で回転施文した後、斜行の沈線文を施文したもの。そして貼付けた口縁下端には、棒状工具で押圧状に施文する。

以上、上述したものが中期末葉のものと想定されるもので、以下からは同末から後期初頭のもの。うちⅢは、口縁部外面を段状肥厚させ、そこに斜行の短沈線を施文。肥厚帯の下段部には沈線で区画文を描き、その区画内に単節R L 繩文を施文したもの。IXは、同じく段状肥厚したもので、単節



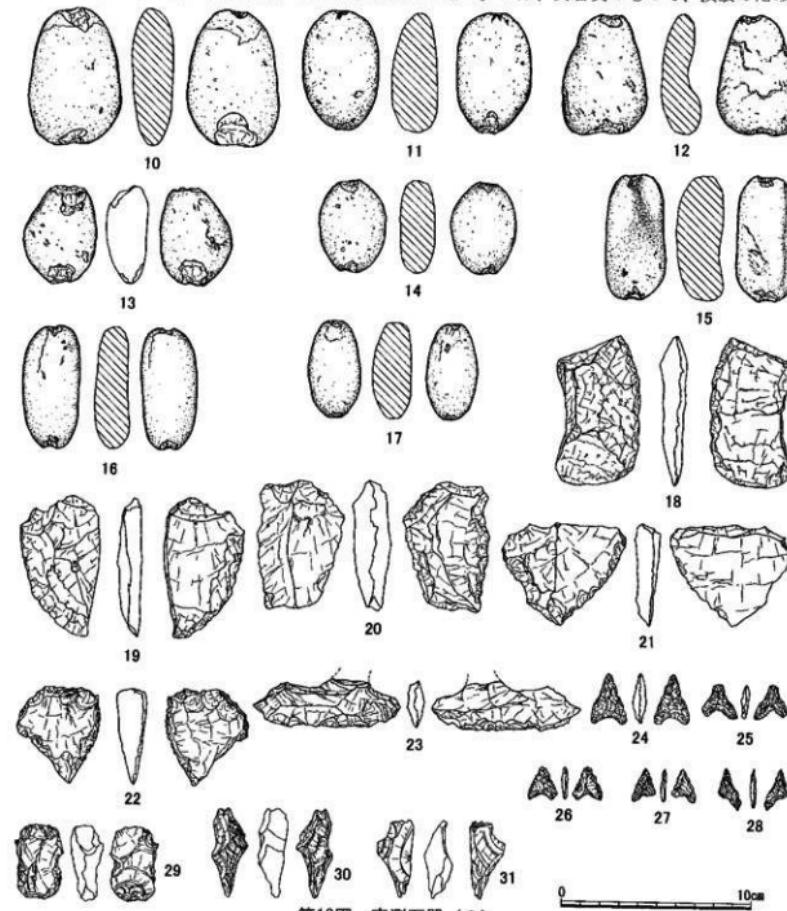
第17図 実測石器 (1)

LR縞文を施し、そこに蛇行状に沈線文を施文したもの。Xは、口段部を肥厚させ、鋸歯状の沈線文を施す。胸部は横長の楕円文を区画的に施したもの。XIは、口縁部を折返し、その三角状を呈した外面に爪形状の刺突文を施文する。XIIは、内面側の口縁部で、肥厚部に短沈線を列文したもの。

3. 実測石器（第17・18図、図版10-1-2）

出土した石器類の種別や石材などについては第3表で掲示しているが、以下その一部を取り出し概説していくこととする。

1は、安山岩質の磨製石斧で、長さ11.5cm、幅5.5cm、厚さ3cmを測る。基部はやや屈曲し、整形敲打痕が顕著で、刃部は両面研磨による円状を呈したもの。2は、貢岩質のもので、損壊のため形



第18図 実測石器（2）

貌が捉めないが、均等的な円筒状を呈していることなどから、石棒と想定されるもの。3も頁岩質のもので、磨製石斧の刃部片。

4～7は、打製石斧で、いずれも凝灰岩質のもの。うち4は、短冊形を呈し、長さ11.8cm、幅6.5cmを測る。5は、分銅形、6・7は、撥形。8・9は、凹石で、前者は火成斑岩質、後者は花崗岩質。両者とも凹みがみられるが前者には両面にあり、その凹跡は不整形でザラばつて粗い。また後者は臍状を呈し円みおび、その周間に擦痕状のものが認められる。10～17は、石錐で、いずれも打矢きという工法によるもの。石材は花崗岩・堆積砂岩・粘板岩質などの河原礫を用材とする。掲示のものは幅広、細長のものというように順列しているが、長さは5～7cm余りのもので、その平均は5.8cm。また重さは37～100g余りで、その平均は約60gを測るものである。

18～22は、削器類で、18～21はサヌカイト、22は安山岩質のもの。うち18・19は、弧状刃で、両面からの浅い剥離調整が施されているもの。20は、腹面の両縁に剥離がみられるが、調整は粗い。21は、背面の両縁に連続剥離調整が施されているもの。角度は高いが、比較的丁寧。22は、両面とも単純したものを片縁部を剥離調整したもの。刃部の角度は高いが、両面から丁寧な調整が施されている。23は、つまみ部分を欠く横型の石匙で、刃部の調整は粗雑。

24～28は、石鏸で、石材は24が黒耀石(乳白色)、以下は安山岩製。うち24は長さ2.7cm、幅1.8cm、厚さ0.5cm測る無茎鏸。いずれも無茎であるが、25・28は、基部の抉入が深く、また26・27・28は、厚さ0.2cmと薄手。29～31は、核・剥片類で、いずれも乳白色の黒耀石。うち29は、長軸の両端面に打痕がみられる剥片石核で、30は2次加工のある剥片、31には2次加工的なものは読みとられず、ただの剥片と思われるもの。

第5章 小括

第8次の調査において遺物は約10,800点、遺構では柱穴・土坑など88基、また配石2基を検出すことができた。ただ遺構においては河流などによる搅乱のために、その実態の明確さは貧弱であったと言うほかないが、収集された10,000点を超える縄文遺物には、新知見の資料も含まれるなど意義深い成果を得ることができた。以下、その分野を中心に捉え、小括としておきたい。

まず360点余り出土した並木・阿高式上器群である。並木式では二叉状工具やヘラ状工具、竹管によるとみられる刺突文、先端の尖った工具を東ねて施文したとみられる細沈線文などがあり、九州にみられる施文のバリエーションとも一致が認められる。一方で回線文内に刺突あるいは押引が施文された資料もあり、こうした施文は九州内でも類例に乏しいようであり、在地的な変容を遂げたものかも知れず、今後類例をもとめてゆきたい。本遺跡山上の並木式のなかには並木式古段階とされる佐賀県平原遺跡にみられるような段状肥厚による区画文様帶を有する資料はみられないことから、おおむねそれに後出する段階のものと考えるが、滑石含土器の中には口縁外面を段状に肥厚し、回線文を施した平原第II群a類に類似した資料も含まれている。九州にみられる型式組列を備えている点で注意できるものである。こうした平原第II群a類に類似した資料の存在は並木式古段階まで遺跡の形成が遡る可能性に含みを持たせるものであるしかしながら数量わずか一点と僅少であることから、この類型が並木式新段階あるいは阿高式に下ることも予想され、その時期的位置付けについては周辺地域の資料の増加を俟って検討したい。

阿高式では口縁端部を押圧し、棒状の施文具による凹点文や回線文を施す資料が大半を占めるが、口縁端部に細沈線文をめぐらせた資料も含まれている。この類型に施された指頭で引いたとみられる浅い太形回線文は並木式にみられる回線文と同様であり、並木式との関連が問題となろう。大方の並木・阿高式土器は九州方面の資料と比べて大差ではなく、九州との時期的な推移を共有しているものと考えられる。胎土に多量の滑石粉末を含入している点と合せて、こうした事象は由来地との密接な交渉関係にあったことを示唆するものといつてよい。

また滑石混入土器が多量に出土した一方で、北山川C式A類・C類、そして矢部奥田式、里木III式の後続型式がみられるなど、本州系を伴っているという点も目を引く。こうした本州系土器は並木・阿高式分布圏内では山口県美濃ヶ浜遺跡、福岡県貫川遺跡、大分県植野貝塚に散見できる程度で稀少といわねばならない。そして口縁部片の割合からみると、並木・阿高式分布域の中では高いといえ、本遺跡がその東限に当る地理的位置にあることと無関係ではないと考える。これらは本州系土器そのものの進出の動きを示すものであるが、出土した滑石混入土器には細描沈線で文様を描出するものも含まれている。その施文手法と文様意匠は阿高式に類例を見出し難く、中期末葉から後期初頭の本州系土器との関わりの中で捉えるべきかも知れない。また段状肥厚された磨消縄文・沈線文土器にどういった型式が伴うのか未確定であり、阿高式の一部は後期初頭に下る可能性もある。

後期の縄文土器を口縁部片点数からみると、後出する中津Ⅲ式と福田KⅡ式を主体とする広戸A・B遺跡と比較して、有文土器の比率が高く、沈線文土器が磨消縄文土器を凌いでいる。こうした構成比は時期差を反映したものと判断される。このうち、磨消縄文土器では単節LRが約74%を占めており、中津Ⅰ式に比定されるものが大半を占めているといえる。また縦位構成に対し、横位構成のものが優越している点にも中津式の地域的な展開を窺うことができるものと思われる。

沈線文土器では、波状文が横位に展開する類型が主体を占めている点に特徴があり、その大半は磨消縄文土器からみて後期初頭に位置づくものであろう。ただし、内面に凹凸がみられるものもあり、一部は中期末葉に遡るものも含む可能性もある。沈線文土器の占める比率が高く、なかでも波状文が卓越するあり方は西部瀬戸内にみられる様相に近く、後期初頭の地域的特性として評価すべきものと考える。

また僅少な比率に収まるが、口縁部を段状肥厚する中期末的な要素がなお残存している点も肥厚押捺文土器が多量に出土した福田KⅡ式を主体とする広戸B遺跡との関わりを考える上で注意されるものといえよう。

一方で、胎土に滑石を含まない阿高式の系譜をひくとみなされる土器も出土している。これらは口縁端部の刻目や凹線文による施文手法、巻貝条痕による器面調整などから、西和田式に分類されるものを含むが、口縁端部に刻目を有さないものや、分断する短直線沈線文で施文した類型などもあり、複数の系列が認められるようである。また無文土器のなかには口縁端部を棒状工具で刻んだ阿高系無文土器も含まれている。こうした後期阿高系上器の存在は、姫島産黒耀石にみる積極的な石材利用にあったことを合わせ、九州東北部との縦起的な関係にあったことを示唆している。いずれにせよ、本遺跡から出土した縄文土器類は九州系の並木・阿高式の移入と磨消縄文・沈線文土器との接触とその変容の過程、さらには集団相互の接触の問題を追究する上で重要な知見を提供するものと考える。

以上、小括とするが、とくに本章では渡辺聰氏にご教示をいただきて成ったことを末尾ながら記して、お礼とさせていただきたい。

図版1 遺跡の近景と堆積状況



1. 石ヶ坪遺跡近景（東北東から）



2. A 1 区の南西壁の堆積状況



3. B 3 区南東壁の堆積状況



4. 壁に表出した陥入ピット坑



5. B 1 区の北西壁の堆積状況

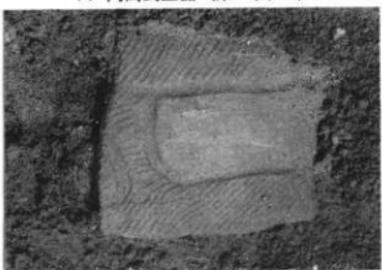
図版2 遺物の出土状況



1. 阿高式土器（第10図-11）



2. 矢部奥田式土器（第11図-22）



3. 磨消縄文土器（第12図-29）



4. 波状沈線文土器（第13図-44）



5. 黒曜石(乳白色)製の石鎌（第18図-24）



6. 安山岩質の石核



7. 凝灰岩質の打製石斧



8. 凝灰岩質の凹石（第17図-8）

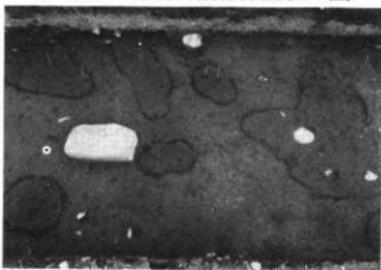
図版3 遺構表出面と検出状況



1. 4層・5層との層界面状況(A 1区)



2. S D01-2の陥入状況(北西から)



3. 層界面に表出した遺構(拡張区)



4. B 2区に表出した遺構



5. S D01上の配石(北東から)



6. S K32の半截状況(北から)



7. S K39の遺構検出状況(南から)



8. S D01-1の完掘状況(西から)

図版4 遺構の検出状況



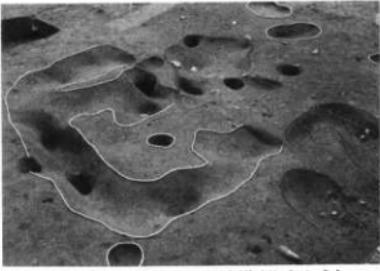
1. B 1 区の遺構(北東から)



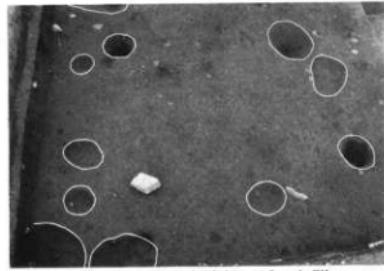
2. B 2 区の状況



3. ベルトを挟んで出土した SK 43



4. SK 43とその周辺の遺構(北東から)



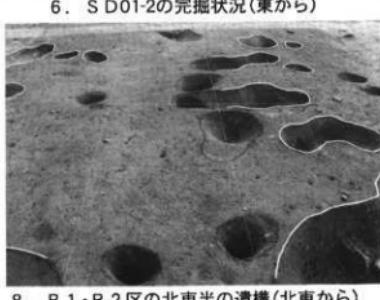
5. B 2 区の東端部のピット群



6. SD01-2の完振状況(東から)



7. SK 31とその周辺の土坑(南西から)



8. B 1・B 2 区の北東半の遺構(北東から)

図版5 調査区全景

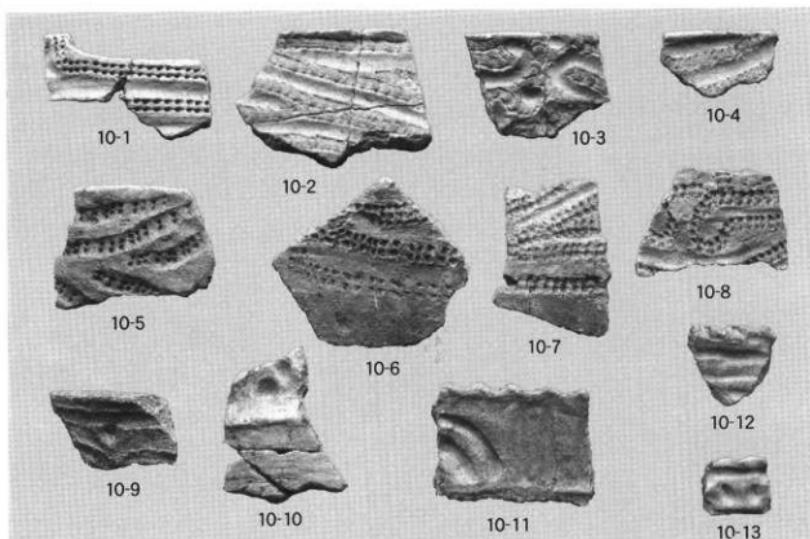


1. 北東からみた調査区

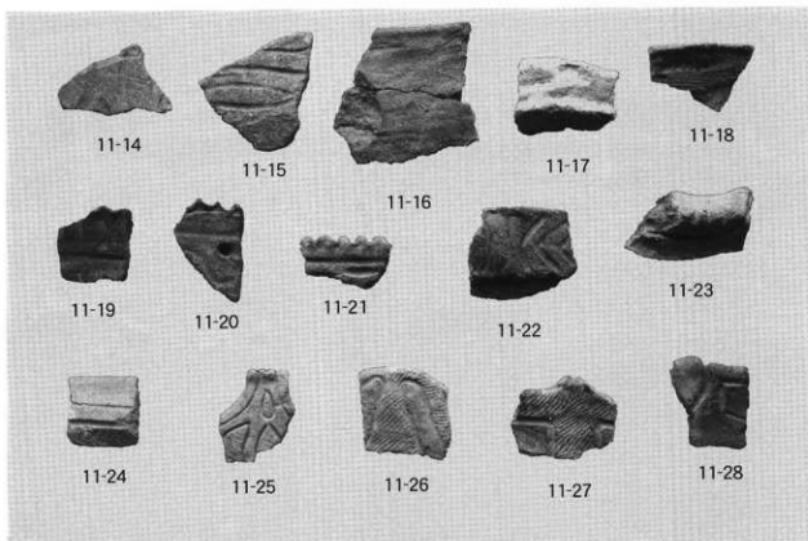


2. 北東からみた完掘状況

図版6 実測土器(1)

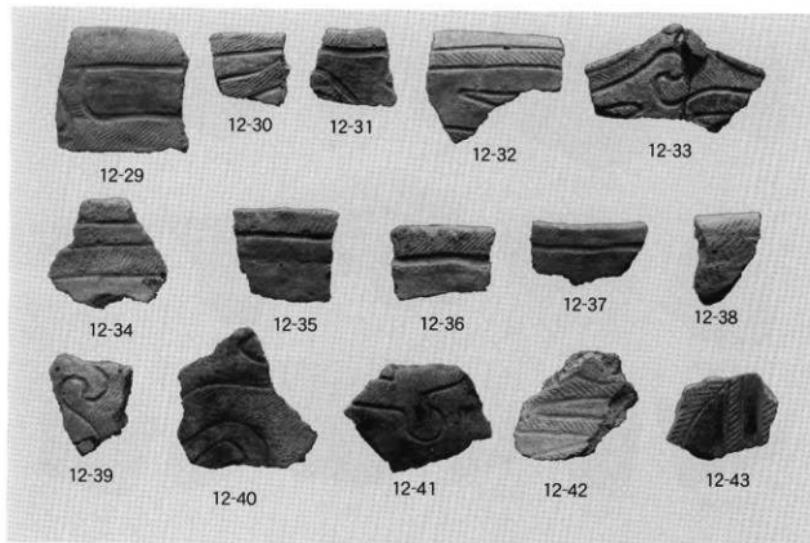


1. 並木・阿高式土器類

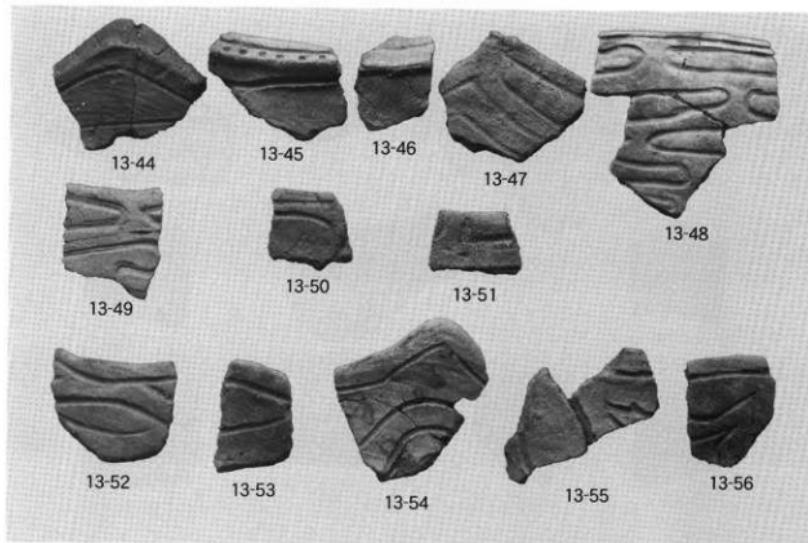


2. 阿高系・矢部奥田式・磨消繩文土器類

圖版 7 實測土器 (2)

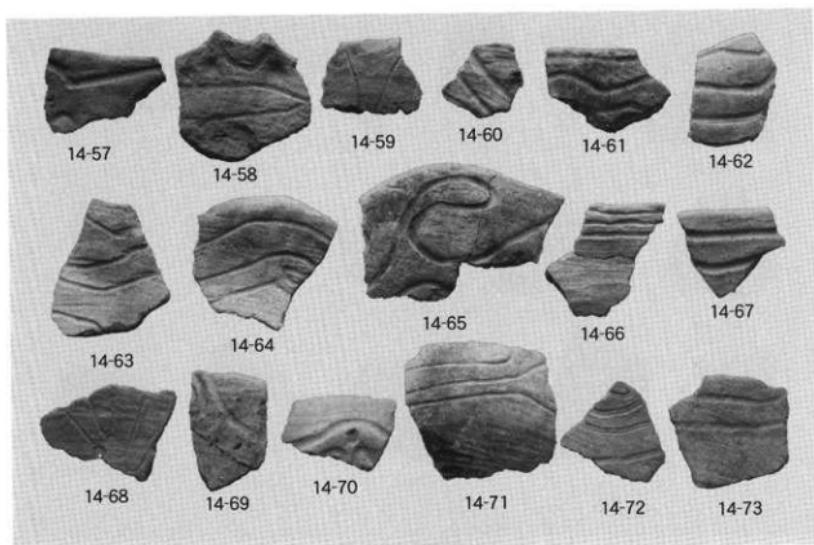


1. 磨消繩文土器類

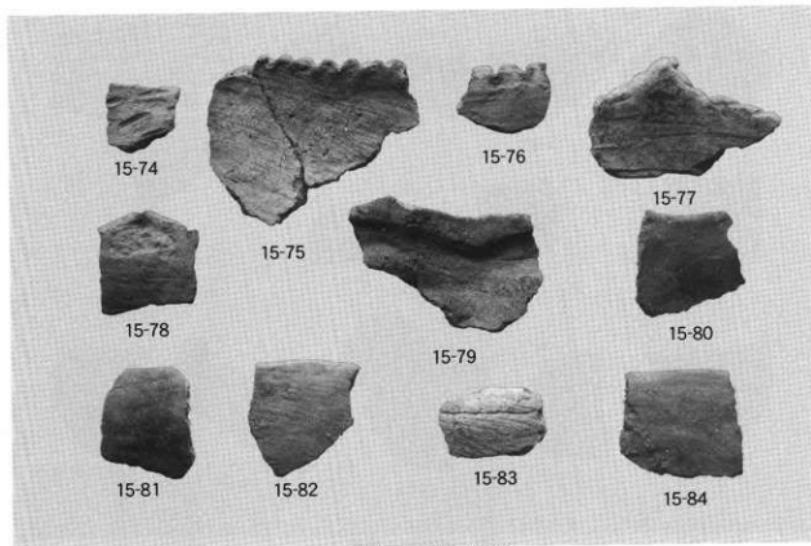


2. 沈線文土器類

図版8 実測土器（3）

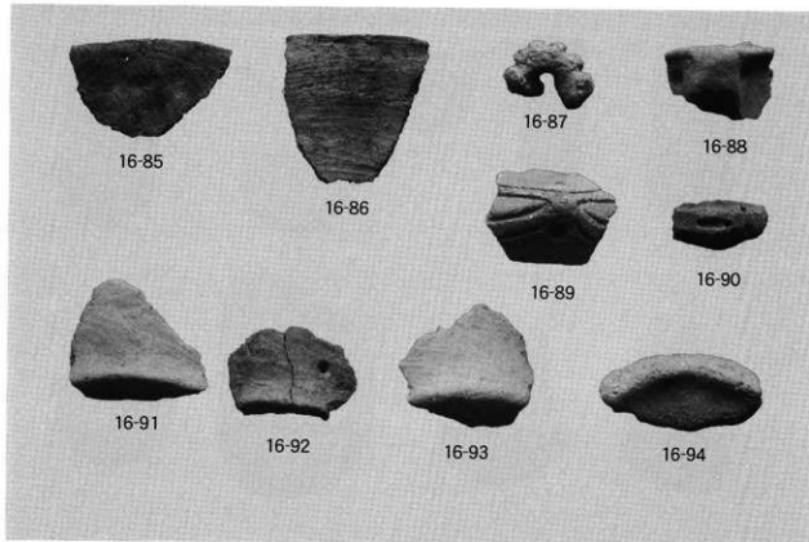


1. 沈線文土器類

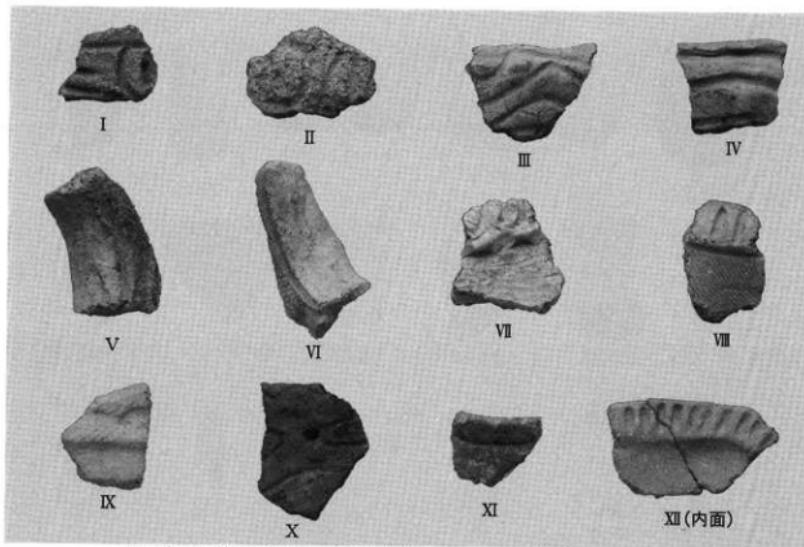


2. 沈線文・無文土器類

図版9 実測土器とその他の土器

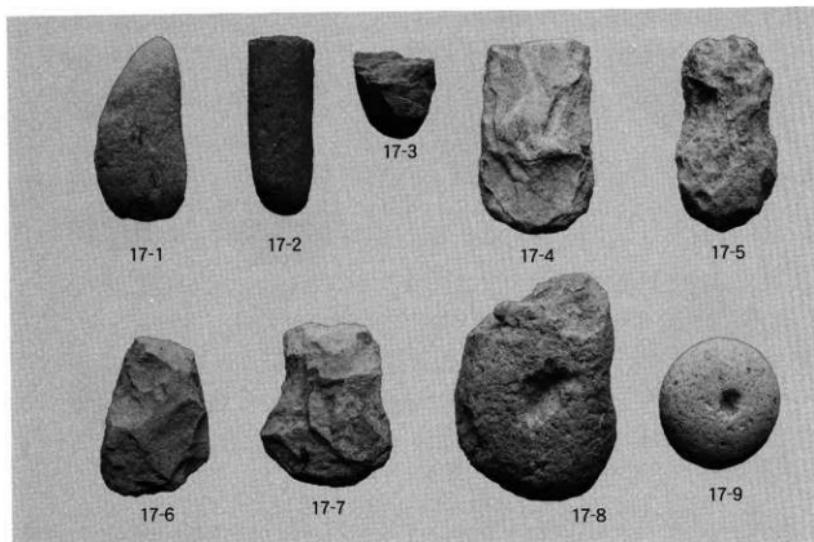


1. 無文土器・装飾突起・底部

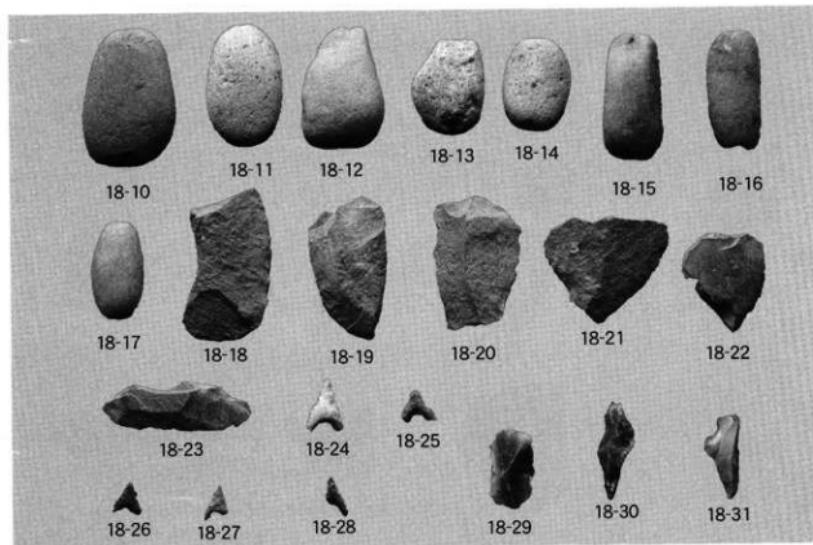


2. 実測以外の土器 (I～VIIは中期末・VIII～XIIは中期末～後期初頭)

図版10 実測石器



1. 磨製・打製石斧・凹石



2. 石錘・削器・石鑽・石器剥片

報告書抄録

ふりがな	だいはちじいしがっぽいせきちょうさほうこくしょ						
書名	第8次石ヶ坪遺跡調査報告書						
副書名							
卷次							
シリーズ名	益田市匹見町埋蔵文化財調査報告						
シリーズ番号	第53集						
編著者名	渡邊友千代						
編集機関	益田市教育委員会文化振興課(匹見総合支所分庁舎)						
編集機関の所在地	〒698-0033 島根県益田市元町11番15号 (〒698-1211 島根県益田市匹見町匹見1233-1)						
発行年月日	西暦 2008年3月21日						
遺跡名	所在地	コード 市町村	北緯	東經	調査面積m ²	調査期間	調査原因
石ヶ坪 遺跡	しまねけんます だし 島根県益田市 匹見町紙祖	32204	34度 52分 53秒	132度 00分 20秒	267.24 m ²	2006.07.19 ~ 2006.12.05	(仮称) 歴史(考古) 資料館建設 事業計画
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
集落址	縄文時代 (中期後葉～ 後期前葉)	柱穴 土坑 溝状土坑	縄文土器 石器 陶磁器			滑石混入土器	

平成20年3月11日 印刷
平成20年3月21日 発行

益田市匹見町埋蔵文化財調査報告第53集

第8次石ヶ坪遺跡調査報告書

発行 益田市教育委員会
島根県益田市元町11番15号

印刷 西村印刷所
島根県益田市高津六丁目27番8号
